

多摩川低地の土地利用の変遷と差異

——両岸を比較して——

田 村 直 子

多摩川低地は、多摩川が福生より下流で形成した狭長な扇状地性の沖積平野である。

左岸は、東京都狛江市、調布市、府中市に属し、低地の北側には東京山手と地続きの武蔵野台地が広がる。右岸は、神奈川県川崎市多摩区、東京都稲城市に属し、低地の南側には多摩丘陵が聳える。両低地とも、東京から18km～24kmに位置している。両岸には、宿河原、布田、押立という同じ地名がある。これは度重なる多摩川の洪水によって一つの村が分断された結果である。

このように昔は一つの村であったのが、多摩川をはさんで両岸に分かれてから、それぞれどのように発展していったのか、その発展の性質は同じであったのか否かを知りたくて調査を始めた。

明治時代、左岸は低地には水田と桑畑しかなく集落は台地上の甲州街道沿いに街村を形成していた。右岸は背後が丘陵地で利用できないので、低地内に集落と農地が混在する散村を形成していた。低地に関しては右岸の方がひらけていた。この状態は昭和20年代まで変わらなかった。昭和30年代前半に両岸とも、市営、県営、都営の公共住宅や工場が進出して都市化された。昭和35年以降、左岸は東京都住宅供給公社によって多摩川住宅が建設されたのをきっかけに、膨張する東京のベッドタウンとして近代的な都市に発達した。現在、高層住宅やレジャー施設が多い左岸にはあまり農地

が残っていない。

一方、右岸は左岸のような大規模開発は行われず農家が主体的に行う小規模乱開発によって都市化されてきた。現在、小規模木造住宅が多く、また梨畑を中心にまだ農地がかなり残っている。左岸と同種の都市化は、右岸では低地を越えて、多摩丘陵に進められている。右岸低地は昔から虫くい状に開発されていて大規模開発を行うまとまった広い土地が無く、都心に直結する交通も無かったことから近代的なベッドタウンにはなれなかったのである。

多摩川は、上流と下流を結び木材や米を運ぶ縦の機能、利水、洪水、両岸を遮断する横の機能等、様々な意義を持っていた。

多摩川を渡舟で渡っていた頃は、両岸地域は間に川があっても隣村の感覚で交流し、川の遮断性を克服していた。右岸低地の発達には左岸の宿場町（調布、府中）の影響下にあったといえる。しかし、橋がかけられると、実際に結びついたのは遠い地域同志で両岸地域は逆に結びつきが無くなった。鉄道や道路の発達によって簡単に都心へ出られるようになり、川向こうへ行く必要が無くなったのであった。都市を流れる川には多くの橋がかけられているが、両岸地域とはあまり関係が無いものが多い。川の遮断性が復活し、これから益々強まっていくと思われる。